

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

# 魔王様! スラギ

小説 瀧澤 春

挿絵 けいじえい

第一章 黒衣の聖処女

第二章 二人の怪傑

第三章 穢された黒衣

第四章 堕ちる身体、砕ける心

第五章 堕ちた日常

006

036

079

143

251

## 登場人物紹介

Characters



### おおこうちいつき 大河内 樹

聖マリアンナ学院の生徒会長兼演劇部部长。その一方でゴスロリドレスを纏う仮面の戦士・スメラギとして学院内の無法者を懲らしめている。優しく、思いやりに溢れた性格で、生徒たちより厚い信頼を得ている。

### ないとうあおい 内藤 葵

聖マリアンナ学院二年。演劇部所属で樹の親友であり、演劇のパートナーでもある少女。気が強く、正義感に溢れる。

### ひめしまなぎさ 姫島 汀

聖マリアンナ学院二年。樹と瓜二つの容姿を持つ謎の少女。頭がよく、スポーツもできるという優等生。

「こ、擦ればいいんでしたわよね……」

偽スメラギが手を大胆に動かしていた様を臉の裏で思い出しながら、双つの肉竿を抜き始める。二本とも大きさ、長さが違うだけに手を動かすのもなかなか難しい。根元から真紅の部分のクビレの一步手前までズリ上げてやると、先端からは搾り出された牡液がネチヨネチヨと噴き出る。そのたびに、湿った草木のような青臭さが鼻腔を擦った。

それは決して気持ちのよいものではない。だがこの匂いに接していると、何故か股の奥が気になつてきてしまう。官能の種から芽が吹くように、臍奥が疼く。

「あつ、のお、スメラギさんっ！ もつとお、き、亀頭を——ああつ、先つぽの紅いやつも強く擦つて、ああうッ」

「あ、紅い所を、ね、念入りにですわね。……わ、分かりましたわ……はあ、ああ」

樹は言われた通り紅い部分——亀頭に指を絡める。生々しい匂いに指先が痺れ、頭まで重くなる。亀頭の感触は、茎の硬直からは考えられないほど弾力に満ちていて、まるでゼラチン質。弾くように抜くと、透明な先走りの分泌はその量を増し、手袋は透けてしまうほど透明液を吸い上げた。手の平にニユルニユル感が染みる。

（すごく熱くて、指……火傷しちゃう。……私の手え、火傷しちゃうよっ！）

正義の黒衣を纏うスメラギが二つの肉棒を抜き、男たちの射精を促している様は、まるで未亡人が夫の喪に服している最中に、男に飢え、男との情事を楽しんでような背徳

的な画にも見えてしまう。

そんなディープな雰囲気には、少年たちの劣情が高められていく。さらに樹が息継ぎのために口を開くたび、覗く舌は唾液をロープのように纏ってウネウネと蠢動し、とてつもなく卑猥だ。卑猥なのに、決してスメラギの美しさは損なわない。性的魅力をより高めるように作用している。本人はそれを全く理解してはいないらしく、無防備な様子を少年たちにこれでもかと見せ続けるのだから、彼らの理性は今にも焦げつきそうだ。

「ううっ、ああ……すぐおおんっ、触るのが初めてなんて思えないよお！」

正義の味方が本人も知らない間に見せる、その悩ましくも、いじらしい牝の姿。まだ女の味を知らない少年たちは、性感中枢をひっきりなしに刺激し続けられた。

「わ、わたくしッ、本当に初めてですよっ！ こんなえっちなこと、今まで一度もやったことないんですもの……」

樹は瞳を潤ませ、うわごとのように弁明を繰り返す。しかし少女の手は恋人の手の感触を知る前に、後輩の剛直の感触を先に知ってしまったのだ。その指先は恋人に愛情を伝える前に男たちの逸物に絡められ、絶頂の味を知るために蠢くのだ。少女の明るいはずの青春が少しずつ淫蕩の空気に黒ずんでいく。

「どうしたんだ、メガネ。お前はこんな楽しいことに参加しなくていいのか？」  
樹の背後から浅沼の声が聞こえた。

「で、でもオ……両手が、塞がってるから……」

呉はチラチラと樹を盗み見ながら、意気消沈の様子で呟く。

「待ってて下さる？ このお二方をすませれば、あなたにして差し上げられますから……」  
樹はクラクラしそうな感覚を押しつけるように言った。肉棒を擦れば擦るほど、発散される男の匂いが、見えない枷のようにどンドン樹の自由を奪っていく。

胸の痠りが強まり、ブラとの接触がまるで後ろから男に胸を思いつきり揉まれているように落ち着かなくなる。先端のニップルは寂寥感ばかりが強く、誰かに摘んで欲しい、そんなえっちな気分になってきてしまう。

「スメラギ。男共はいっぺんに果てさせてやった方がいいんじゃないか？」

「そのようなこと言われても無理ですわ！ わたくし、両手は塞がっておりますから……」  
「空いてんだらうが、お口がよおつ。そこで啜えてやればいいのさ」

（口で何て……そんなことできるはずない……っ）

舞台で台詞を紡ぐ口を男性器で汚すことは、樹にとつて嫌悪するべきことだ。しかしそれでいて偽スメラギへの対抗意識は燃え続け、負けたくない自分がある。複雑なジレンマに嵌り、自然と樹の身体の動きは消極的になってしまふ。そこへ再び浅沼が言葉を挟んだ。「あっちは三人いっぺんにやって、頑張っているのによつ。やっぱり偽者にはそれだけやる度胸はねえよなあっ！」

「にせっ!? ち、違うつ……! わたくしが本物ですわっ!!」

樹は叫ぶように訴えながら、辺りに漂う淫欲に彩られた空気を前に胸震いした。

(負けないっ。偽者に負ければお母さんの……みんなの学院が大変なことになっちゃう)

樹が意を決した瞬間。体内の血脈がドクンッ、と大きく脈打った。

「安心して下さい……。あの、その。わたくしの口を使っていただけで構いませんわよっ」  
樹が口を開くと、そこはたっぷりの唾液で潤んでいた。グロスでも塗ったように唇が粘ついた光沢に輝き、口腔内ではペロが男根を誘うかのようにクネクネと動く。

「っ、はい!」

呉は喜び勇んだ。そして臍にまで届きそうなほどに反り返った剥き肉棒を掴んで、スメラギの口めがけ突き込んできた。

「んぐううお! うえ。オオオンンっ!」

先端を濡らした肉塊が上唇を削り、上顎を扱きながら、喉奥まで迫った。熱の鏝に歯を押し当てると、その硬さからは予想もできない抜群の弾力が口腔いっぱい爆ぜる。

(っ! お、大き……うくっ、く、くさいっ……)

んお、オオオオ……オオ……オオッ、ンウウオ! 樹は獣のような濁った声で咽ぶ。

亀頭に突かれて、口蓋垂がグイッと上に持ち上がり、喉全体が大きく波を打つ。

息をするたび口いっぱい腐臭が広がり、下腹の違和感がさらに膨らむ。涙腺が痺れ、

みるみるうちに涙の粒が溜まっていった。顔が息苦しきで真っ赤になり、必死に息を継ごうと舌を動かしてスペースを空けようとする。しかしそんな舌鋒の動きが、剥けたばかりの肉矛の敏感な箇所を撫でるのか、呉は情けなく喘いだ。

「ふうあつ、ああつ、あああつ。そんな舐めないでえ……い、樹い先輩あいいつ！」  
呉はだらしのない声の合間に、ある人の名を叫んでしまう。

（えっ、どうして……私の名前……）

不意打ちな叫びに、スメラギは思わず両手の動きを止めてしまう。

（もしかして。スメラギの正体が……私だつてこと、分かってしまったの!?!）  
勢いに任せてしまつて上げた声に、少年はバツが悪そうに視線を虚空へ向けた。

「へへへ、何だ、そのいつきつてのは、てめえの女か？」

ドッドドッド。樹の心臓が今にも決壊しそうなほど拍動した。スメラギは身体が芯から凍りつくのを感じた。しかしそれでいながら身体の火照りは消えない。熱と寒、その対極に位置している感覚同士のせめぎ合いが、少女を心理的・感覚的両面で追いつめる。

「違います！ 樹先輩は、ぶ、部活の……その……先輩で」

「それで思わずその憧れの先輩をズリネタにしようとしたのかっ」

（そ、そうだったの。……正体、分かった訳じゃないのね……）

樹は周りに悟られないように、小さくホッと息をついた。



「スメラギどうだ。こいつの憧れの先輩の代わりにしてやったら。これも人助けだろお？」

呉の腰が引け、肉棒が口から引き抜かれた。先走りが唾液に混じって樹の顎を伝う。

「それで……えほっ、ウ、うふう……その方のお気持ち満足するならば……」

樹がそう言葉を絞り出すと、呉の顔がぱあつと輝いた。

「そ、それじゃあ……スメラギさんっ。僕のこと、呉くんって言ってくれませんかっ？」

樹は首肯した。後輩が自分の姿で卑猥な妄想を描いていることはさすがにショックだったが、今の自分がスメラギである以上下手なことは言えない。

呉くん。そう囁くと、自分で心に針でも刺しているような鈍い痛みが骨の奥を疼かせた。

（私、本当に後輩を相手にしているんだよね……私、なんていけない先輩なの……）

まるで後輩を誘って、自分の性欲を満足させているようだ——奇妙な妄想が湧いてくる。そしてそんな倒錯的な夢想が、少女の欲望を密かに盛り上げていく。

「へへ。尻を触らせて、口で奉仕するなんてな、好きものな正義の味方だぜっ」

樹は反論しようとしたが、その前にその口には再び呉の肉棒が押し込まれてしまう。

じゅぶぶぶぶ！ 再び喉奥を突き上げる硬い触感に、樹の顎が痺れる。

「ああっ、樹せんばあいつ、アア……ず、ずつとず、好きでしたあつ！」

呉は妄想を爆発させ、スメラギの頭を押さえ、いきなり凄まじい勢いで腰を喰らせた。ずんずんずぶぶ、じゅぶ、じゅぶうっ！

少年の屈折した愛情表現が、少女の理性へダイレクトにぶつかってくる。

(そんないきなり、……こんなに激しくっ!?)

恋人同士が愛交をするように、樹の心は沸点に達してしまいそうに何度もぐらついた。

「んぐっ、おおんんウ、ううぐっ……んむうっ、ムウウウウッ!!」

樹の口は唇を捲り返されるほどの、呉の激しいストロークの前にされるがままになる。

ごぶっ、じゅぶっ……ぬぶっ、どぐうぬうふううっ。

唾液と肉液とが磨りつぶされ合って、淫らなへドロ音を掻き立てる。あまりの激しい抜き差しに、スメラギのツインテールが暴れ回り、自身の双つの膨らみをペシペシと打った。

「んんぐっ、んふっ、んちゅ……ぢゅづうう……もおんぐお」

肉棒はさつき以上の反りを口の中で見せ、上顎にこれでもかと先走り液を塗りたくってくる。そして先端は喉奥を打ったと思えば、そのままカサは上顎のツルリとした部分からザラザラの部分までを穿る。頭蓋骨まで痙攣するような、魅惑の痺れが全身に流れた。

(あぁっ……苦しくて、臭いっ。早く終わってっ。口が変になっちゃウッ……!)

ごぶっ、ぎゅぶっ、じゅぶっ、じゅぶぶっ……! 唾液と混ざった濃厚な先走りが、幾筋も唇の隙間から流れ落ちた。樹は苦しさに吐き気を催しながらも、左右の肉棒を再び握り直し擦り始める。にゅぶっ、ぬぶぶっ、ちゅ、ちゅちゅ。肉棒を掴んでいるのか、それとも先走りを握っているのか、触感だけではどちらがどちらなのか分からなくなった。

「ううく、スメラギさあつ、ン。はあ、急に激しくつ、ううあわああああ!!」

突然開始された手コキに左右の少年たちは力むこともままならず、ただ本能のなすがままに快楽を求め、腰を前後させた。樹は手の中が摩擦で燃え上がりそうになる一方で、すでに身体は溶鉱炉のように熱く、頭の中が煮詰まりそうだった。

「樹い！ 樹いつき、いつきいっ！ 好きです、好きですつ、ずっと好きでしたあつ！」  
ぐぶううう、ちゅぶううつ。呉の男根と樹の喉奥がぶつかり合っている音が、身体の中で響く。それに混じって聞こえる後輩からの愛の告白。少年の糸を引くような粘っこい声に、少女は身体だけでなく心まで汚される気持ちになってしまう。

普通の状況で聞いていればどれだけ嬉しかっただろう。樹はもちろん呉を才能ある後輩以上のものとしては見ていないが、こんなに煩悶する必要もなかったはずだ。

込み上げてきたのは罪悪感。少年からの思慕の言葉を聞き流し、そればかりか学院を守るとはいえ仮面と衣装で正体を隠し、部員や親友を欺き続ける自分への罪の意識。

（こんな私を許して……これも全部学院のためなの。ごめんね呉くん……、葵……!）  
「くちゅ、ちゅぶ、ぺくちゅ……んふう。ぢゆるるるるつつつ！」

少女は謝罪の意味を込めて積極的に舌を使い、唾液を絡めた。舞台では観客を引きつける天賦の美声が、今は少年一人を絶頂へ押し上げるための最高の性処理道具だった。

「ふごおいっ！ うあああつ、吸われるうう……うあああうっ!!」

演技の台詞を紡ぐ口から漏れるのは、はしたない粘着音。亀頭が敏感だという言葉で頭の中で反芻しながら、べろおお、ずぽおとおと喉奥へ引き込み、ペロで裏筋をこね回す。

(ああつ、どんどんくさい液が身体の中に入ってきてるうう、すごいいいいっ！)

肺の奥まで染みてくる汚臭は樹の本能へ、女の性を呼び起こせとばかりに、乱暴に訴えかけてくる。先走りが喉を通るたび、美声に翳りが差すような絶望感が浮かんで、猛烈な熱によって上塗りされていく。

(すごいっ、この液体……すごく、アアッ……私の口、変になってきてるううう)

猛烈な激情が味覚を狂わせる。舌に先走りが滴るたび、脳内をピンク色にさせるほどの鮮烈な甘みが口中に広がるのだ。

「んんっ、ちゅうぱっ、んちゅづづづ……ぢゆるるるる、んっく、んんんうっ！」

太い肉棒が樹の唾液を浴びるたびに、ドクドクンと強く脈打ち、舌上で暴れた。

「うあうわっ！ い、いつきつ、す、凄いやおおっ！」

愛情を受け止めてあげられない。そのせめてもの償いとして少年を満足させてあげたい。そんな屈折した優しさが、樹の舌を、口腔粘膜を手練れの娼婦のように変えていく。全身を使つての荒々しい愛撫にブラがズレ、白い乳房がまろび出るのもお構いなしだ。

汗を浴びてキラキラと輝く淡さの中に咲く、可憐な紅実も破廉恥に露わになるのだが、樹は構わず少年の肉棒の吸引を続ける。んぐう、むううう……美声が何度も上擦った。

「すげええぜつ。へへ。おっぱい丸出しにしやがって。こいつぁ！ 正義の味方じゃなくてただの痴女じゃねえのかっ」

浅沼の嘲りでさえ、奉仕に集中する樹には傍観者の戯言にしかすぎない。

ジュボオッ、ジュボ、クチュ……ンムウ、んんあずずうううう……！

両頬をへこませ、紫のルージュが剥げるのも気にせず、呉の男根から噴き出る先走りの一滴まで味わうように啜り、尿道を何度も叩く。口腔体温で剥がれ落ちる恥垢をも、どんどん飲み下す。そして一心不乱に口と両手を動かし、男たちの絶頂を誘う。

「うわあつ、も、もうっ！ だめえ、いつひいの口に出しちゃうよっ！」

びくびくびく、と亀頭が大きく膨らみ始めると、樹はさすがに目を白黒させた。——瞬間、ドクククッと、臍の真下にある子宮が大きく反応する。

(出しちゃうって……精液……出るのっ!?)

圧搾を続ける左右の肉棒の先端も、膨れ始めるのが分かった。

「我慢で、できないいつ、ごめんなさあいっ！ スメラギさんッ！」

「かけるっ。……うう、スメラギに、俺精液かけれるんだあつ!!」

手の中から飛び出してしまいそうなほど少年たちの欲望は脈動し、そしてやがて猫の目のような切れ長の鈴口が大きく見開かれた。

ドビュッ、ビュルルルウッ！ どぶぶううううっどっぶっ、ぷびゆるるううッ!!

「んぶうっ、ぐう！　むややあううううううっ——っ!!」

少女は膝立ちの姿勢のまま、二方向から発射される白塊を顔いっぱいに浴びる。呉の肉棒を吐く暇もない。口腔挿入のまま肉棒からの噴流濁液を、強制嚙下させられた。

どびゆるるるるるっ！　びゆくっ、どっぷうううっ、どびゅ……どぶっ、ごうぶっ……。マスクはもちろん、鼻や口にまで飛びかかってくる白濁に、樹は呼吸さえまなならず溺れるような思いで足掻く。臓腑の中で精液の灼熱感が炸裂し、少女の意識はぐちゃぐちゃだ。

「あつうッ、ひいいいい、ひやあああつ！　やめッ、ああんあああ、熱いいいい!!!」

口にのめり込んでいた肉棒はすっかり強張りを失い、引き抜かれた。続々撃ち出される白濁が頭上に落ちては、頭皮が燃え上がる。生汁は長い睫毛にまで垂れ落ち、大きな瞳に精液がシみる。精液で強張る片目を無様に半眼にさせ、ゲホゲホと樹は咽せ返った。

「こ、これが精液なのっ……!!　臭いいい、髪の毛にい、し、染み込む……ッ」

白濁は、少年たちの肉棒から絶えず吹きこぼれていた透明な液体の数倍濃厚なゼリーだ。髪にまとわりつき、前髪から滴り、真紅のマスクにまでその白い触手を伸ばす。

「あ、ああああ……」

樹は自分の人格まで汚されるような惨めさと、悪寒にも似た切ない戦慄に見舞われる。悔し涙も出ないほど少女は心理的に打ちのめされてしまった。このまま白濁に溶けて消え



てしまうのではないか、そんな幻想の中に耽溺しそうになる。

「ごぼおお、どぶぶぶ……どぶううう……くぶ、ちゅぶぶうう……。肉尖塔はあれだけ大量に内容物を嘔き上げたというのに、しばしば痙攣を起こしては名残の精液を吐瀉した。」

「ひああああ……あ、ああ……っ！」

ドグンッ！ 手で押さえていた下腹が大きく波打った。ドレスにかかった大量の精液と共に鳴っているかのように、腹を押さえなくては耐えられないほどの膨張熱を発する。微痙攣を繰り返す腹部を押さえながら、少女は虚ろな瞳に何とか意識を込めた。

「おめでとうスメラギ。お前の勝ちだ。よくもまあ、男三人を射精させやがったぜ」

樹が立ち上がった拍子。ねっとおおお……と、ドレスの裾に溜まっていた白塊が床に落ちていく。何物にも染まらないはずの黒が白に穢れる姿に、心が痛んだ。

「これで、わ、わたくしが、先に……はあ……や、やりましたわ、……あん」

スメラギはアイデンティティーであるドレスを汚され、乳房を腕で抱えるようにして浅沼を見上げる——その姿は勝者とは思えない惨めなモノだ。まだ偽スメラギは三人の少年たちをイかせていない。ねとつく白い物質の匂いに苛まれながらも樹は勝利したのだ。しかし。

「やっぱりテメエーが、偽モンだぜ。スメラギよ。へへへ。こんな早く三人の男を絶頂させる腕持つてるんだもんなア……こりゃあ、とんだ好色だぜ」





心が揺らぐ。だが樹は苦しむのが自分だけなら耐えられる。

これは汀と樹の問題なんだ。関係ない葵だけは、助けてあげたい！ 心の声を振り払う。そして樹はついにその手で、スメラギのミステリアス性を強め、カリスマ性を与えていたマスクを外した。樹の素顔ばかりでなく、羞恥に悶えた赤ら顔まで露わになる。

「か、……会長っ……!？」

仮面のゴスロリ少女の正体が生徒会長ということに、一瞬その場の時が止まったような静けさに包まれる。

樹は会長と呼ばれた時身体に震えを覚えた。撮影されて感じてしまっている自分を知られる恐怖と、撮影されるたび感じた興奮の残滓が、半々で少女の心を犯す。

(私……とうとう、こんなたくさんの人に……素顔を……写真まで撮られて……っ)

まるで刑場に引き出された罪人が最期の刻を待つように、冷たい汗が背中を伝った。

「スメラギではありません。皆様もご存じでしょ。男たちに身体を捧げる偽者の噂」  
場は一層騒がしくなった。カメラ小僧たちの視線が、樹へ向けられる。

「ご、ごめんなさい。みなさん。わ、わたくしは、偽者のスメラギ……なんです……」

偽りの真相を言った瞬間、腰砕けになりそうになった。白を黒といい、正を邪というように、膝を屈し偽者の汚名を自ら被る——樹に突きつけられたあまりに残酷な運命。

「そんなっ！ な、何で会長がっ!？」

あれほど立派な人がそんな紛い物をしているなんて。彼らの目に浮かぶのは心配の色だ。「まさか誰かに脅されて、それでやらされているんじゃないんですかっ!!」

大河内樹をこんなに信じてくれている人がいるなんて。少女は嬉しかった。自分が今まで必死に学院のために働いてきたことは無駄ではなかった。しかし今はそれを受け入れられず、そればかりか否定しなければならぬ。全て葵を助けるため——仕方ないことだ。

「……ち、違うのっ。私は、自分の意志で……み、みんなの注目を浴びたくて……」

心にもないことを言い、樹はもう死んでしまいたくなる。周りの心配が、失望、不信に変わる。それはスメラギに向けられたのではない。正真正銘樹へ向けられていた。

「くそっ! 結局俺たちを嘲笑って楽しんでたって訳かよっ」

「生徒会長がそんな目立ちたがり屋のいい加減女だったなんて、知らなかったぜっ」

男たちは追いつめるように樹を囲むと、さつき以上に遠慮なく樹の身体の撮影を始めた。

「ふん、自分で俺たちからカメラ奪つといて……今は撮影されてよがるなんて、最低だよ」

女子の更衣室を盗撮したり、撮影した写真を裏で売りさばいたりしてきたために、樹によつてカメラ没収の憂き目にあつた彼らは、自分たちのことを棚に上げ、樹を責め立てた。樹は納得がいかないのを感じながらも、だからといって自分自身が犯した失敗が帳消しになる訳ではない。責められることは覚悟していたのに、周囲からの責め苦に、心は激しく動揺してしまう。樹は自身がこれほど打たれ弱いことに驚くばかりだ。

「ご、ごめんなさい……でも、さっきは、しょ、しょうがなかったの……」

撮影という昂揚感に酔ってしまっていた、どうかしていたの、と樹は弁解する。

しかし樹の言葉は、後輩たちの怒りの火へさらに油を注ぐ結果になった。

「ふざけるな！ カメラという高尚な芸術を理解しない、頭でっかちめっ！」

乱暴な言葉に身をすくめ、樹は反論できない。

「こんな尻に尻尾埋めてよっ！ アヌスで感じる変態女っ！」

「ひいきゃあっ!!」

グッと思いつき尻尾を握られる。その握力の震動で、凄まじい焦熱が尻奥で弾けた。

「おいおい、そうじゃないだろ。猫ちゃんにはもっと相應しい声があるだろうがっ」

樹は頭を押さえつけられ、しゃくとり虫のように尻を天井に向ける形に固定される。

「ごめんなさいにやあつ。皆さん、騙していてごめんなさい、にやあつ。あ、あ、や！」

ゴリッ、ゴリゴリゴリッ！

尻尾にくっついた無数の繊毛がかぎ爪のように排泄肉に引っかかる。さらに粘膜質全体が、外へ引き出されるような凄まじい痺痛が背骨を伝い、意識に襲いかかってきた。樹は肛粘膜を八つ裂かれるような摩擦感に叫んだ。

（お尻が変にッ！ ああ……変だよっ、お尻がっ）

だがアヌス責めは最初の頃よりも嫌悪感は少なく、それが樹の焦りを加速させる。

「何だよ変態女っ！ 尻弄られてよがってんのかよっ!? ほら、謝れ！ 芸術に謝れ！」  
膝だけではとても体重を支えきれなくなり、四つん這いになる。すると、余計に男たちへ尻を差し出しているかのようになってしまう。不可抗力とはいえ、まるで男へ進んで身を差し出す淫売のように自分が思われ、少女の心はキリキリと痛んだ。

「あっっん、ごめんなさあい、カメラを馬鹿にしてえ、アアン、ごめんなあヒイイイン！」  
猫尾が繊細粘膜を擦るたび、窄まりの入り口がクイクイッと弱々しい力で尻尾を締めつける。尻尾が抜き差しされるたび、ドレスの裾が捲り返っては、水蜜桃のような立派な肉尻を覗かせた。アヌスの入り口から最深部にかけて舞い上がる被虐の炎が、精神を灼く。

「ご、ごめ——ひいつ、もうっ、しっ尻尾っ、い、弄らないでくださいにやあうん！」

尻尾が抜ける、もうすぐ抜けちゃうう!? 尻尾の後退は、ゾクゾクとした戦慄に変わる。少女の尻孔から三分の二ぐらい抜け出た尻尾は、腸液でびしょびしょだった。

「早く謝れよっ、本当に悪いって思ってるのかよ。変態会長おっ！」

パシヤッ、カシヤッ！ 少女の排泄液に湿った尾や、肉感豊かな臀から続いて、腸液で淫らに輝く太股を、カメラで撮影される。

「ごめんやあさい、だまひいてえ……アア、そんなに撮っちゃいやですわあっ！」

反論の声は途中で立ち切られる。尾が再び尻孔へ埋め込まれてきたのだ。

「ふみやああああああああっ!!」

胃袋が持ち上げられるほどの強い力。排泄されたものがまた引つ込む、気持ち悪い触感に、背筋が引きちぎれてしまひそうになつた。

(本当におかしくなつちやうつ！ お尻、壊れちやうつ!!)

尻尾が埋まると、尻朶がぶるるんぶるると微痙攣を繰り返し、突然アヌスからじゅぶじゅぶぶ、と大量の腸液が噴き出した。まるでもつと犯して欲しいと嘆願する涙のようだ。(ああつ、私のいやらしい姿で……みんなを興奮させちやうつんだ……)

アヌス粘膜への強い刺激に、濡れた瞳を回りへ回す。カメラを手に取っている者は一部で、ほとんどが制服のストラックスごしのテントを張った肉棒を撫でさすっていた。

少年たちの興奮が感染したのか。樹の脳裏に自分の処女を引き裂いた肉棒をよぎらせる、男たちを誘うように剥き出しの双尻肉をたふんたふんと左右に振つてしまう。

「さつきからこれ挿れっぱなしで。やっぱずっとずうーつと感じてたんだあ」

少年の言葉責めに、もうろうとした意識で頭を振る。そんなことない、はずなのに。

お尻なんかで感じるのは変なのに。指摘されると、頭の中がぽおつと温かくなるのだ。

「そんなことありませんにやあつ、違います——くひゅうううつ!!」

尻尾による激しい抽送運動。埋まるたびに全身が痺れ、抜かれるごとに腸がそのまま引きずり出されるようなおぞましさに理性が悲鳴を上げる。しかし不幸にも樹の強靱な精神はそう易々と挫けない。そんな彼女の忍耐強さが余計、彼女自身を苦しめる結果になつた。

ぐじゅっ、ぶちゅっ、ずぶぶっ、ぐぴゅっ……ぢゅぶっしゅううっ！

「アアッ、んんあっ、くううっ！」

直腸という底なし孔を刳り抜く、悶絶抽送が長引くごとに、唇を割る声は甘く蕩ける。

（私ッ……どうして、苦しかったのに……変、おしりが……すぐなくなってるううう）

まだ異物挿入の違和感は拭えない。だが排泄と挿入が繰り返されるうち、ふわふわとした浮遊感が襲い、脳裏にジイインと心地よい波動が轟いた。

（何か、変。……これ……ああ、嘘！ き、来ちゃうのっ!）

それは絶頂の気配だった。身体の奥底から猛烈なスピードで駆けてくる目眩。しかしそれを導くための快感回路は突如として断ち切られる——尻尾ピストンが中断されたのだ。

「ふみやっ！ みやあー、みやあー……」

樹は肛門で絶頂するという異常快感のくびきから脱することができた。だがその残滓は全身に、まだ完全に消えきれない燻りを残すばかりだ。

「何がにやあにやあだッ！ ふざけてるのかよっ！」

そう叫んだのは、樹が誰かに脅されて偽者を演じているのでは、と考えた少年だった。自分を信じてくれた人をまた裏切ってしまう。樹の心が軋みを立てる。

「にやふうっ……しっかりして、自分を忘れちゃダメえ、えやああああああ!?」

尻尾が一気に引き抜かれると、心臓を一突きされるような快美感が排泄孔で爆発した。

ズリユウウウウウウウウ……！

「何が、自分を忘れちゃダメ、だよ！ どうだっ……くっ、キツキツの尻ま〇こめッ」

少年は樹の腰骨に手を添えると樹のアヌス目がけ、自らの肉棒を垂直方向に突き立てた。

「だ、ダメエ！ にやあうっ！」

脳天に、激鉄が下ろされたように目の前に火花が飛び散った。

「ん……うぐっ……ふゆひゃあ！ はあっつっ！」

ミチ……ミチミチミチッ！ 尻孔が入り口の所から無理矢理拡張させられる。焼け石を呑まされるような灼熱が粘膜を焦がした。それは無機物のキャットテールで味わせるものではない。生命力の滾り、それがまるごと押し寄せる驚異に少女は満足に呼吸さえできない。まるでさつきまでの尻愛撫が練習だったかのように、狂おしい呻りが腹奥に流れた。

「どうだよ、どうなんだよっ、僕のおちんぼはどうなんだよ」

根元まで差し込まれ、そして引き抜かれる。突き刺さるような衝撃に骨盤が拉げそうだ。

「ああ、ひい……気持ちい……うう、こんなの苦しいだけええ……！」

尻尾の毛並みでは味わえない、血管が這い回る、ゴツゴツした生きた接触感に、腸壁がどんと削り取られていく。腸液がどびゅ、びゅぐる、と肉棒によって穿り出される。

「ウソつくなっ！ 糞孔で僕のをこんなに締めて、うう、食いちぎれそおおだああ」

グジュ、ジュブッ、ズブブッブブズッ！ 激しく行われる少年からの迫力あるピス





トンの咆吼。肉棒に柔粘膜を穿られれば、妖しい快感が身体の奥底から発掘されてしまう。おうとう……クハッ、という少女の獣のようなわめきもそれに混じった。

(うそっ、いやああ……こんな感覚……知りたくないッ、だめえ、うう……葵いつ!)  
すでに樹の顔は汗だくで、呼吸をするたび咽せた。甘酸っぱい汗も首周りの色を変えるほど大量に出れば咽せ返るのも当然だ。樹は何とか親友のことを考え、気を紛らわせようとする。だが。『信じてたのに』という葵の最後の痛烈な一言まで脳裏に甦った。

葵の顔が苦悶に歪む様が甦る。そして今アナルセックスに燃えている少年の失望の色。二つの歪みが大きな鏝となつて、少女の理性を突き刺した!

「も、もうっ……くうあうっ、壊れッ……壊れにやううっ、と、飛んじやウウウ!!」  
今まで尻に与えられた惨めな行為の数々と、それによって呼び覚まされた酩酊感——それらが今、空間を乗り越えて連結した。肛虐によつて躰けられた変態的な快感の連なりが、少女の理性を快楽の坩堝へと放り投げた。

「おけつがこんなに気持ちよかつただなんてえ! 僕の精液でお仕置きだあつ!」

尻粘膜の中で、龟头部分の膨張率が粘膜を焦がしながら急激に跳ね上がった。

ドビュルルルルルルルルルル、ビュブブブブブブ。ドッ、ツヌプウウッ!

樹は思いつきり上体を持ち上げ、エビ反った。同時に尻の孔で大量の精液が爆発した。

「熱い……いいいいいいいい……やあああああああ——っ!!」

「ふわああつ、吸われるううつ……おとおおおおッ」

少年がけたたましい叫び声を上げ、大量の精液を発散した。

（おしおきされてるう……みんなに、嘘、ついてきたからあ、お仕置き……されてるう）

偽スメラギという烙印を背負わされた少女は、自らの贖罪作業にゾクゾクとしたものを覚えた。それは理性がどれだけ消え入りそうなほどになっても、その存在を主張してやまない。それはハッキリと意識に告げてくる尿意。全身の神経が尿道に集まったかのように激しく疼く。まるで絶頂快楽が、排泄器官と連動しているようだ。

（出したくないっ、出しちゃだめえっ……な、なのにい！ あ、あ、ああああつ……！）

尿門がひくつき、排泄感、絶頂の昂ぶりに巻き込まれる。必死に括約筋を働かせるのだが、一度膨らんだ尿意を引っ込めることは容易でない。それが絶頂感冷めやらぬ中では、ほとんど不可能な作業だった――。

「ひやあつや、あああつ、漏つ、漏れえつつ！」

ぷしやあつ、ぷしやあつ。ぶツツ、しゅうゆうううううううううつ！！

上体を持ち上げた姿で、漏らした尿がピチャピチャと床を打つ。長々と流線を描いて飛び散る黄金水。少女は肛門絶頂を極め、その上後輩に見られながら粗相をしてしまった。

「すげえ……尻でイって、お漏らしなんて……会長は本当に恥女だったんだ……」

カシヤカシヤと、放尿の様を永遠に記録に残そうとカメラでの撮影を繰り返す。フラッ

シユが利尿剤のように、瞬くたびに黄金水がピュピュッといじらしいほどに漏れ出た。

「はッ、ううっ……」

尿を出しきった樹の臉は眠たげに下り始める。絶頂の余韻で腕の支えが弱まり、上半身は沈み、樹は頭を床に寝かせた。ツインテールがクタクタと疲労にまみれて床を這う様は、少女の惨めさを強めた。男根が引き抜かれると、樹は鼻にかかった声を漏らす。排泄粘膜は男根を絞り足りないようにひくつき続け、尻肉や太股、そこかしこの筋が引きつっては、絶頂の余韻を所々に残していた。教壇から下りてきた汀は、冷血な顔を歪めて嗤う。

「……………樹ってイク時に『飛ぶ』って言うのね。……お尻でイって最高？」

樹は苦しげに首を横に振る。バサバサッと鳥が羽ばたくように、ツインテールが捌けた。「それじゃあ、その首を縦に振れるまでやってみましょうッ」

肉棒が抜かれ、白濁を逆流させる樹のアヌスへ、汀が自らの手で尻尾を再挿入させる。

ズブズブウウ!! 窄まりが、一回りも大きい尻尾を躊躇いもなく呑み込む様は圧巻だ。

「ふああッ、ひいやああッ、さ、刺すなあああああ……!」

びゅつつくうう……! 精液が尻尾の抜き差しで勢いよく尻から噴き上がった。

精液を排泄器官で攪拌される汚辱に理性は金切り声を上げ、心臓の高鳴りは止まらない。

「汀あつ、あんっ、かき混ぜないでえ!! うっ! ふうあうっ! あひあいいッ」

どぶうくぶくううくうっ、ねちゅぶうぐつつつぶッ! 尻尾の荒々しい動きで掻き出さ



れた精液がぶぢゃぐぢゃと、ドレスの裾を汚す。どっぷうん……そしてまた尻尾が引き抜かれる。猫尾にねぢゃつゝく精液が長く糸を引き、露わになった。

「ほらほらほらつ、どうしたの？ 段々気持ちよくなってきたんじゃない!?」

「なつてない、なつてえ……ううくうふあああつ！」

ずりゆううつ、突然尻尾が取り払われる。そして休む暇なく、剛直による重爆がダイレクトにゴム粘膜を爆砕する。間髪入れない肛門調教の連続に、少女は息も絶え絶えだ。

「んあつ……くつ、ううッ！」

鞭打ちの代わりに長大な異物を、火の輪くぐりの代わりに肉棒で肛悦を味わわれ、まるで自分がサーカスの獣になった気さえする。二度目の肛門挿入は、さつきよりもやや太めの肉竿と精液の張りついた腸壁との摩擦感がたまらなかつた。

「だめえつ！ も、もう動かさないでッ——ふにやあつ、にやあつ、飛ぶ、飛んじやう！」

身体がバラバラになつてしまふいそうなほどの崩壊感が、快感神経を刺激する。まるで快を受け止める器がどンドン小さくなつていくように、絶頂の間隔が短くなつてきていた。

「生徒会長様どうだ！ 俺のちんぼの堀り具合はよッ！」

「す、すごいからあつ……も、もう突かないでえつ！ 飛ぶう、また飛ぶううつ！」

虐げられることへの喜びを見出した罪深き孔は、歓喜の叫びを上げるように男根を搾る。尻で感じる禁断の快楽に、心では抗いながら、少女は惹かれていくのだ。

「肛門に精液たっぷり出してあげるよっ。いいっ？ ちゃんと写真に収めてもらうんだぞ」少年の腰フリは、子宮側の壁を執拗に刮いだ。そしてその激しさに、俯せ状態で押しつぶされた乳肉が弾けてしまいそうになる。第二の腔のように感度抜群の肛門を穿られながらの予想外の快楽の横槍に、少女は火炙りに処されるように悶絶した。

「だめ、だめええ、だめええええええ!!」

ドブブツ、ゴビユツ、ドビユウルルルルル!!

樹はツインテールを振り乱し、頭の中に幾つもの閃きが駆け抜けるのを体験した。

（お腹……痛い……あはあ、破裂するううう壊れちゃうよお……）

二人分の精液が腸粘膜を甘く蕩かし、擦る。もうダメだった。火だるまになりそうな快楽に身体が悲鳴を上げた。括約筋は引きつり、臀峰は何度も跳ねる。未成熟な肛門器を熟させる禁断の法を課されるように、尻や腸が別のものへ造り替えられていく気さえした。リリンツ……首に結わえられた鈴が、少女の危うさを感じ取ったように寂しく鳴る。

「うう。……さあ……抜くぞっ、樹先輩っ」

ズリ……ズリズリツ。肉棒の圧迫感がどんどん引いていく。

「あ、ああああ、ぬけええ……で、出てくるううう!」

天井に向けられた皮下脂肪の艶めかしい臀部がプリプリ揺れる。腹の中ではまるで地響きのように、放たれたばかりの精液がぐるぐるぐるぐる不吉な物音を立てていた。

人体の神秘を見せつけられた少年は、腰を動かすのも忘れて感心していた。

「さあつ、樹。後輩のために扱くんだぞ。じゃなかったら、また尻を扶るからな」

脅し文句に少女は震えた。今この瞬間も肛道を拡張させる太い二本の異物は、微妙にずれたタイミングで蠕動を繰り返し、粘膜質へ弱い刺激を送り続けていた。勢いが弱いせいか圧迫感の後に痺れが続き、莫大な熱量が膨張する感覚に身体が跳ねる。

「尻、ゆるゆるになつて。糞垂れ流す羽目になるのはいやだろ？ しつかり相手の顔を見て、気持ちいいか確かめながらやるんだぞ」

「う、動かします……にやあつ……はあつ、はうつ」

樹は大人しく両手の中の、二本の肉棒を擦り始めた。根元から亀頭の先に、ゆるゆると指を滑り込ませ、時にペチャペチャ舐めた。これでいいんですね……と少年たちに潤んだ瞳を向ける。それはまるで本物の恥女のようなのだ。

「はむっ。んちゅ……ちゅっ、ちゅっ……んぺろっ、ぺろっ」

猫がミルクを飲むような繊細な舌使いで、突き出された少年の逸物を刺激する。舌を左右交互に沿わせる間も決して手は弛めない。根元まで抉るように筋をたどり、陰囊を弄ぶ。ンチュッ……ヂュルルルルル。樹は小さな口の周りを先走りでべちよべちよにしなから、懸命に男たちへ奉仕を続ける。その舌に応えて、濃厚な先走りがドピュドピュ出てきた。濃厚な我慢汁を舌の腹で転がすと、口腔いっぱい心地よい倦怠感が生まれる。



「ンうちゅううぱっ、んんむふうあ。硬くて……それに太くてえ……ンっ、はあっ!」  
順調に少年たちの官能を引き出していると、いきなりの分厚い肉の衝撃が頭に反響した。  
ヴァギナ挿入を果たしている少年と目が合う。

「凄いだろ。へへ。ケツに二本も挿してやがるから、子宮が下がってきてるんだぜ。ほらっ、こうやって少しだけ腰を動かすだけで——」

少年はゆっくりと少しだけ、腰を前へ迫り出してみせる。グビッ! 少女の意識に猛烈な熱情がぶつかった。熱した鉄板を打たれるように、樹の意識は引き伸ばされてしまう。

「にやふうあううううっ!」

(本当に、す、凄いっ……スゴイよお!)

たった一瞬のできごとだが、あつという間に快樂神経がオーバーヒートを起こしてしま  
いそうになった。こんな鬨りの衝撃は今まで味わったことがない。全身が木っ端微塵にな  
ってしまいそうな衝撃に、少女の小さな身体はただ翻弄されるしかなかった。

「さあっ、たっぷり抉ってやるからな」

少年は加虐性を丸出しにして嗤った。

恐かった。もし、あんな衝撃を何度も受けたら……子宮が壊れてしまうかも知れない。  
いや、樹自身が突き殺されかねない。だが拒否することは許されないのだ。

「にあはううッ!」

思いつきり腰を動かされた第一撃目にして、目の前で火花が散った。たった一度のストロークで肉棒に絡めている指先が震え、握力がなくなりかける。

あぐう!? ズブツズブブツ。太い肉凶器が子宮口をこじ開けた。

「うううううああああああアンンンン!!」

褌を穿られる比でない快楽の刃の直接攻撃に目を瞬かせる。そして男根への隷従感が頭をもたげる。少女の膣が織りなす音は、少女に送られる葬送曲のように感じられた。

「うううッ! そんなあ、子宮に入つて、うそおおお…ンぢゅううううッ!」

敏感な子宮口の神経を通して、肉柱を包む太い血管、その一本一本がはつきりと頭に伝わってくる。繊細な子宮が抉られる擬似感覚に、少女はケダモノのような嬌声を漏らす。味わってはいけないような禁断の魔悦の前に、少女は手コキの速さを増していく。

(いやあッ…、私壊されちゃううッ…!)

子宮口がこじ開けられ嵌り込んだ肉棒は、心臓に突きつけられた刃と同じだ。その先端が狙うのは子宮。だが肉棒は刃のようにすぐ、命を奪おうとはしない。切り裂いた相手の理性を枯渇させ、あらゆる快楽を直接脳内に刻むのだ。膣の裏側が燃えるように熱くなり、敏感な膣孔を指で穿られるような凶悪な快楽の嵐に晒されてしまう。

「んぶっ、ぐんぶっ! んちゅっ…ちゅっううッ…ンあ」

少女は頭を激しく上下に振りながら、必死に肉棒を抜き上げた。唇のルージュが剥げる



やる。勢い余って口蓋垂を殴るように擦られると、官能の火花が頭の中で散った。

「はっはは。生徒会長はフェラ好きだなあー」

男は自分の打ち込みが生徒会長の容貌をエロティックに染め上げることに気をよくする。ズンズンズンッ！ 連続して膣内に響く子宮の絶頂声。肉棒が一往復することに、大量の本気汁がドバドバアッ！ と飛沫を上げた。

「ち、違う、好きいなんてえっ、あふうっ、んんくううううっ！」

子宮を穿たれると、尻穴に押し込まれている異物の所にまで反響し、尻を弄くり回されているような被虐が伝ってくるのだ。

「はうううう、おひりりい、いひやあああああああっ！」

息をつく暇さえない昂揚感。肉槍で子宮を叩かれるたびに、快楽の荒波が増進されて頭へ雪崩れ込んだ。新たな命が眠るべき揺りかごは、今や少女に子どもを生む幸せを与えるのではなく、鮮烈な快楽増幅器官となって、理性が削れる喜悦を教え込む。

「うう、もうそろそろ……むはあむはああ。やっぱ子宮をやると襲の吸いつきも全然違う」  
さつきから襲はまるでそれ一つ一つが独立した生物のように裏筋にしゃぶりつき、竿部分を痛いぐらいに締め上げていた。それに加えて、子宮の弾力も亀頭ごしには凄まじい。

「んちゅっ、ぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅ……！」

樹は先走りを口にいっぱい飲み、口の中で唾液と混ぜ亀頭にかける。

(早く早く出してしまつてえっ！)

ビクビクッ、ビクッ！ 手の中の二本とも射精が近い。びっくりするぐらい肉竿が上下に揺れた。皺の寄るグローブごしに、淫熱が少女の血肉を爛らす。

「三回目ッ、むはあっ……会長の変態おま○こにいつぱあああい注ぎ込んでやるゾ」

少年の力みが樹に伝わる。髷が捲り返されそうなほどの勢いで引き抜かれ、ボーリング機並の凄まじい一撃が、子宮を打擲した。細胞単位で女が蕩けさせられる情熱的な責めに、愛液が搾られた果汁のように噴き出す。そしてにゆるにゆるの髷に揉みつぶされる太い肉棒も、海面体にこれでもかと思はれ血液を送り込まれ、先端が大きく爆ぜた。

ドブビユリユリユリユリユリユリユリユリユリユリ、ゴッポオッポオオオオオオオオオオオオ

樹の見る世界が色と匂いを全て失い、それでも感覚だけが無情にも雪崩れ込んできた。

「イクッ！ ふみやああああああ……！ イクイクイクにやああああッ!!」

少女は発情したような甲高い叫びを上げた。その声はどこか甘く、赤ん坊が母親を呼ぶためだけに泣くような声質だった。子宮を溺死させるほどに大量に注ぎ込まれる精液。

傷口に熱湯を注ぎ込まれるような、全身の神経という神経を全て麻痺させるような衝撃に、身体が大きく跳ねた。

「ふあああああ、熱いっ！ 顔かけちやあ、燃えにやあううううううッ!!」

ドビユルッ、ビュキユギユビュビュビュ!

左右から破裂した精液を顔いっぱいにかぶる。ネットリとした精液が猫耳に注がれ、精液の重たさに耳が折れる。黒髪を斑にして、鎖骨の窪みにまでドロツとした黄色がかつた液が溜まっていく。大量にかけられた精液は、顔から首筋、胸までをべちよべちよに汚す。スperlマで汚された白い肌、淫蕩な赤みが浮かび上がる。肌と衣服が擦れる感触が気持ち悪いのに、それが気持ちいい——矛盾の感覚が少女をさらなる高みへ持ち上げていく。「イクのが、イクのがとまらないよおおおおお」——

少女の意識はずつと高みへ掲げられたまま、下りられなくなった。意識に切れ込みを入れられ、無防備な自我を強奪されてしまう。まるで全身が塵芥ちりあぐたになってしまいそうな虚無感に筋肉を貫かれ、内臓という内臓が圧碎される。一度の絶頂が呼び水となって、さらなる絶頂を呼び寄せる。絶頂ループに囚われた少女になす術はなかった。

「まひやあつ……ああんツ！ イクツツ、おま○こ、ひいひいっつクウツ！」

膣の強烈な収斂とも合わさって、尻粘膜も凄まじい勢いで連動収縮する。腹の中に鋼鉄の棒を埋め込まれているように、その重厚な窒息感に瞳を濡らした。

「ああつ……うつ。ま、また膣中にい、出されひやつたにやああ……ツツツク」

男が腰を引くと、大量の白濁のゼリー質がぼちよぼちよと股間から溢れた。同時に尿穴がグジグジと激しく蠢き始める。腿の筋が引つ張られるような過激さに、樹は鼻を鳴らす。出ちゃう……出ちゃうヨッ！ 少女は歡喜に頬を染め、放尿の瞬間に悦びを覚える。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**